金剛寶戒寺便

令和八年十一月一日発行　第百五十二号

檀信徒の皆様、こんにちは。「秋は夕暮れ」と言いますが、私は秋の早朝が好きです。紅く染まった朝の空は、まるでこの世の浄土のようです。

さて、法話会では十月より『仏教聖典』を題材に学んでまいります。『仏教聖典』はホテルや旅館の客室に聖書などと並んで置いてあることがあるため、目にしたことがある方もいらっしゃるかもしれません。

仏教を学ぶ上では「三蔵（経・律・論）」やさまざまな教え、修行があります。この『仏教聖典』には大乗仏教や上座部仏教の教えが大変分かりやすく説かれています。法話会ではゆっくりと皆さんと読み進めていきたいと思っております。第一章は「お釈迦様の一生」です。その生涯自体が、仏教を学ぶ上での示唆に大変富んでおりますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。

その聖典の冒頭に、『法句経（ほっくきょう）』からの抜粋が紹介されています。**「悪をなさず、善を行い、自らの心を清らかに保つこと。これこそがすべての仏の共通の教えである」**これは、「七仏通戒偈（しちぶつつうかいげ）」といい「諸悪莫作（しょあくまくさ）衆善奉行（しゅぜんぶぎょう）自浄其意（じじょうごい）是諸仏教（ぜしょぶっきょう）」という偈文（詩）として広く知られています。「お釈迦様を含む過去の七人のすべての仏様たちが共通して人々に伝えた、仏教の根本的な教えをまとめた詩」という意味になります。

真言宗の視点でこの言葉を読み解くと、さらに深い意味を見出すことができます。

・諸悪莫作・衆善奉行＝身（行動）・口（言葉）・意（心）のそれぞれにおいて、悪い行いを慎み、善い行いをすること。

・自浄其意＝自らの心を清らかにすること。

このように、身・口・意の三つを整えるという点で、真言宗の基本である「三密」の教えにも通じるものがあります。真言宗では、私たちの心には本来、仏と通じる清らかな性質が具わっていると考えます。これを「自性清浄心（じしょうしょうじょうしん）」といいます。そのため、「心を清める」とは、外から何かを付け加えることではなく、自分の中に本来具わっている清らかさに目覚め、仏の智慧や慈悲を日々の行いに表していくことだと受け止めることができます。

有名な逸話があります。唐の時代の詩人・白居易（はくきょい）が、高僧である鳥窠道林（ちょうかどうりん）禅師に「仏教の最も大切な教えとは何ですか？」と尋ねました。禅師が「諸悪莫作、衆善奉行（悪いことをせず、良いことをしなさい）」と答えると、白居易は「そんなことは三歳の子どもでも知っている」と軽く笑いました。しかし禅師は「三歳の子どもでも知っているが、八十歳の老人であっても実行するのは難しい」と返し、白居易は深く納得したと伝えられています。なぜ、分かり切ったことを実行することがそれほどまでに難しいのでしょうか。それは、向き合うべき相手が「外の世界」ではなく、私たち自身の「心」だからです。『法句経』には次の言葉があります。**「戦場において百万の敵に勝つよりも、一人の自己に勝つ者こそ、じつに最上の戦士である」**

他人に勝つ「勝利」は恨みを生み、次の戦いを引き起こします。しかし、自分のエゴに打ち勝つ「真の自己コントロール（克己）」は、誰をも傷つけず、自分に本当の平和（心の静けさ）をもたらしてくれます。だからこそ、お釈迦様は戦場の大英雄よりも「自己に勝つ者」を最上の戦士と称えたのです。

善いと分かっていても、実行することは難しい。だからこそ、日々自分の心と向き合い、少しずつ実践していく。これこそが、まさにお釈迦様が生涯をかけて示された「仏道」だと私は思います。

○法話の会「仏教聖典を読む」
　十二月八日（火曜日）十四時から
○写経の会（当山檀信徒会館・会費千円）
　十二月十九日（土曜日）十四時から